



動物：めん羊コリデー種、2ヵ月齢、雌、自家生産。

臨床所見：90日胎齢にアカバネウイルスを静脈内接種された妊羊5頭のうち、2頭はウイルス接種後10日、30日目に剖検した。残り3頭の妊羊は4頭の子羊を正常分娩し、子羊は外観上とくに異常を認めなかった。本例は、生後体格が小さい程度で体形異常、運動障害はなかったが、発育不良として殺処分した。なお、母羊の飼育管理は10月下旬まで昼間は放牧し、夜間は舎飼いとす、その後は終日舎飼いとす。給餌は配合飼料と乾草を自由に摂取させた。

肉眼所見：剥皮すると臂筋、背最長筋および半膜様筋などの軀幹筋は、筋束単位に線維の走行に沿って灰白色の条線が密に認められた。灰白色病巣におけるこの条線は粗大で、やや硬く表面に隆起し、線維相互間は粗鬆であった。筋束の断面でもこの灰白色変色部は、表面から深部にまでおよんでいた。他の軀幹筋には変状が認められなかった。なお、心筋を含む内臓諸臓器には特に異常が認められなかった。

組織所見：弱拡大で観察すると、やや好塩基性の染色態度を示す筋線維が束状に走り、その中心部には石灰

様物質をとり囲んだ肉芽腫様病巣が認められた (Fig.1, H-E, X112)。この肉芽腫様部は、主に組織球性細胞から成り、石灰様物質を中心とした合胞体性巨細胞像とともに、筋鞘細胞核の連鎖 (Fig.2, H-E, X560)、リンパ球の浸潤を伴う結合織の増生が認められ、石灰様物質はPAS染色陽性、Kossa染色陰性であった。なお、肉芽腫様病巣をとり囲むやや好塩基性に染まる筋線維は、軽度のPAS陽性反応を示した。この病巣に隣接した好塩基性筋線維群は、しばしば筋鞘核の数と大きさの増大を伴っていた。その他の変化として、筋線維の横紋のみだれ、硝子様膨化も認められた。

この標本についての意見は従来野外で認められた羊の筋肉変性と変らぬものであり、筋細胞の再生、巨細胞の起源、および変性像などについて述べられた。出題標本の参考資料として供覧した90日胎齢アカバネウイルス接種後10日、30日目の胎児における軀幹筋の崩壊像を考慮する論議はなかった。

組織診断：子羊の筋変性症